HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	協働的対話における学習者の母語使用とその役割 : 社会文化理論とバイリンガル・アプローチの視点から[論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	酒井, 優子
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第15166号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87300
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yuko_Sakai_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：酒井優子

審査委員　主査　教授　河　合　　靖
副査　教授　鄭　　惠　先
副査　教授　山　田　智　久（西南学院大学）

学位論文題名

協働的対話における学習者の母語使用とその役割

－社会文化理論とバイリンガル・アプローチの視点から－

本論文は，英語の授業での協働型意見交換タスクにおける学習者による日本語の使用とその役割，および，学習者間の支援の提供による相互行為の構築の様子の解明を試みている。日本の英語教育は，「主体的・対話的で深い学び」を目標とする学習指導要領を掲げ，「話すこと」「やり取り」のある言語活動・協働学習を推進しているが，「英語の授業は英語で」行うことを規定する英語学習指導要領においては，モノリンガルの基準で言語能力を評価する視点に立ち，母語使用については特に指針を示していない。これにより，英語授業内での日本語使用を罪悪視する風潮が見られると筆者は指摘する。

本研究では，8名の日本人英語学習者が4人一組で意見交換タスクに取り組む発話データと参加者のインタビューをもとに，視点を変えながら3回に分けて質的に分析した。第一は英語タスク中の日本語使用の抽出とその機能の分類である。第二は，学習者の英語と日本語の発話量と機能の比較と，英語習熟度が与える影響の考察である。第三は，タスク遂行中の学習者間の支援に焦点をあてた，日本語・英語の言語の違いによる比較や英語習熟度による影響の考察である。本研究の分析は，社会文化理論とバイリンガル・アプローチの視点に基づいている。前者は，認知と知識は社会的・対話的に構成されると主張し，後者は，学習者を初級も含めて日本語と英語の両方を言語資源として活用するバイリンガルとして捉えている。著者は，こうした考え方を踏まえて，母語の役割を認めて両言語の混用に前向きな意義を認めるトランス・ランゲージングの概念を支持している。総合考察では，協働学習における母語使用の正当な評価に基づき，共通の認識基盤

を確立しやすい母語を認知方略として部分的に取り入れることで，「主体的・対話的で深い学び」を促進する可能性を示唆している。

本論文の口頭試問は，令和４年７月２９日に対面で公開により実施した。まず，本人による論文の内容に関する説明があり，これについて副査２名，主査１名が質問者となって質疑応答が行われた。質問は主に以下について行われた。分析に関する章立てについて，分析の対象となったデータおよび学習者グループについて，学習者の言語環境と分析結果の関係について，母語の否定的な役割の可能性について，学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」について，複言語・複文化主義との関わりについて，発話の機能の分類と発話量の関係について，機能と支援の分類の重複の可能性について，日本の英語教育が置かれた状況と英語運用能力向上の目標が具現化しない実態の関係について，研究対象の学習者の特性と結果の一般化および英語教育に与える示唆への影響について，同じく研究対象の教育環境と結果の一般化および英語教育に与える示唆への影響などについての質問が行われた。著者は，いずれの質問にも真摯に回答し，その内容は概ね良好であり，本研究で至らなかった点については限界として実直に認め，今後の課題として指摘した。

口頭試問の後，主査及び副査で本論文について，研究成果の意義，方法論的貢献，教育への示唆などの観点から審査した。２グループ計８名の言語活動におけるデータを分析対象としており，結果の一般化には難があるが，視点を変えて何度も微視的に分析を重ねた点は，日本の教育環境における学習活動の一例をその文脈のなかで詳細に理解する上で評価に値すると判断される。審議の結果，審査担当者は，次の点において本論文の意義を認めることで合意した。１）トランス・ランゲージングの教育利用を視野に入れた実証的な研究は発展途上であり，今後日本の英語教育分野における応用言語学研究に影響を与えると予想される。２）社会文化理論やバイリンガル・アプローチに基づいた先行研究では，ライティング活動における協働的対話やペアワークを観察したものが主流であり，本研究のような自由討論形式の意見交換タスクを用いた研究は新規性がある。３）トランス・ランゲージングの概念はこれまで２言語併用の言語環境の文脈で言及されることが多かったが，日本のようなモノリンガル環境の英語教育でその有効性を示したことは評価できる。

以上の３点において，本論文は高い学術的意義を持つものである。よって著者は，北海道大学博士（学術）の学位を授与される資格があるものと認める。（1789 字）